

STS

— STSセンター活動報告

常石敬一

一九九三年三月二日から三日までパネル展「人間の価値」を神奈川大学キャンパスの図書館で、ドイツ連邦医師会、ベルリン医師会および京都ドイツ文化センターと共催で行った。また展示を機会に、二三日にシンポジウム「医学と戦争—日本とドイツ」を開催した。以下にその際の挨拶その他を採録し、「人間の価値」展およびシンポジウムの報告とする。なお今回のシンポジウムについては『医学と戦争』というタイトルで神奈川大学評論叢書の一冊として御茶の水書房より刊行の予定である。

一九八九年に「人間の価値」展がベルリンで初めて開催されたときの、ベルリン医師会の声明「一九三八年—

月九日を思う」。

ベルリン医師会はいま、ナチズムの中で医師層が果たした役割と、忘れることができない犠牲者の苦しみを思い起こす。医師組織を結成する我々は、我々自身の過去とナチズムに関与した医師の責任を問題にしないわけにはいかない。

ナチス政権掌握の何年も前から、医師たちも人間の社会的差別と少数者の迫害を奨励する思考をはっきりもっていた。遺伝優生学や人種的遺伝体質、遺伝的に劣る人間、人生の余計者、生きる価値のない人生、といった思考であり、ナチス保健政策の基礎を築いた思考である。

これが社会的に自明のものとされ、差別を正当化したの

である。それが人間の絶滅を可能にしたのである。

ユダヤ人の医師は「アーリア人」の治療をすることが許されなくなり、一九三八年、法律によって、かれらの新規採用と開業が禁止され、またかれらの既得の営業許可が消滅させられた。ユダヤ人および異なる思想をもつ人びとが排除させられたことに対して、同僚の医師サークルやその団体からはほとんど抗議の声が挙がらなかった。

医師たちは「遺伝病の子どもの出生を予防する」法律を準備するのに関与し、無数の病気の人びと、身体障害者に対する不妊・断種手術をおこなった。

医師たちは選別と殺戮の官僚機構に協力した。専門家としてかれらは選別の鑑定をおこない、国家医療行政機構に協力して、強制収容所へ患者を移送させた。

医師たちは「安楽死病院」で働いた。かれらによる「認定」がヨーロッパのユダヤ人の工場的規模の殺戮の基礎になった。

医師たちは強制収容所、研究所、大学病院の残酷な人体実験をおこなった。

ごくわずかの医師たちがかれらのキリスト教的、社会主義的、共産主義的世界観にしたがって抵抗したにすぎない。

ベルリン医師会はその過去の重荷を負う。我々は悲し

みと恥を感じている。

神奈川大学での同展に際しての学長の挨拶。

このたびドイツ連邦医師会、ベルリン医師会および京都ドイツ文化センターと、私ども神奈川大学の共同主催によって「人間の価値」展を開催する運びとなったことは、まことに喜ばしいことであります。このような機会をおつくりいただいた京都ドイツ文化センターに対して、心から敬意を表します。

「人間の価値」展は、一九八九年ドイツで、そして一九九二年にはアメリカおよびカナダで開催され、大きな反響を呼んだと聞いております。その一端は、昨年一月一〇日付の『ニューヨークタイムズ』の記事からもうかがうことができます。この意味の大きい展示会が、日本では京都など西日本の数都市でしか開催の予定がないことを聞き、是非東日本でも開催いたしたく、神奈川大学で開催を引き受けることとしました。これは地域に開かれた大学として当然のことと考えております。

開催にあたっては、本学のSTSセンターが担当いたしますが、このセンターは、神奈川大学国際経営研究所内に付置されています。STSとは科学(S)技術(T)社会(S)の略で、科学技術と社会との関連を論議するものであり、その範囲は非常に広く、科学技術が

戦争・軍事に果たす役割を論議することもSTSの一つの役割であり、こうしたSTS研究を目的とした日本で初めてのものといえます。このセンターではこれまでに「生命倫理」「生物化学兵器」「戦後日本科学技術史」等をテーマに、STSフォーラムを開催しております。

今回の「人間の価値」展が問いかけているものは、単にナチス時代の医学者の非人道性だけではなく、科学の名の下に行われた基本的人權の侵害の問題を現在のわれわれは克服しているのか、ということでありましょう。

これは医学だけの問題ではなく、ハイテク抜きには存在し得ない現代社会に生きる私どもにとって、避けて通ることのできない問題であります。その意味で「人間の価値」展およびそれと連動してのシンポジウム「医学と戦争―日本とドイツ」が私ども神奈川大学で開催されることは意義深いものと思います。

神奈川大学は、今後とも地域に開かれた大学として、こうした催しを積極的に開催し、また科学技術と人間の関係をより良いものとする研究の発展に、貢献していく所存であります。

二三日に開催されたシンポジウム「医学と戦争―日本とドイツ」のプログラムおよび挨拶。

パネル展示「人間の価値」展の神奈川大学での開催を

機に、一九四五年以前の日本とドイツの医学や優生学がどのようなものだったか、また日独の医学界がいわゆる戦後責任についてどのような態度をとってきたかについてシンポジウムを開催いたします。

日本における医学犯罪としては、満州第七三一部隊（石井部隊）の人体実験が有名である。石井部隊を中心とする医学・科学の名の下による蛮行は、これまでに歴史研究者によって明らかにされてきた。しかし、人体実験や生物兵器の使用といった具体的事実について、少なくとも日本政府は一切認めていない。また、日本の医学アカデミズムはこの問題について沈黙を守っている。ドイツでは戦後半世紀近く経過してから、医学者自らが医学界の戦争犯罪・戦争中の医学犯罪を明らかにした。それからさらに数年が経過したが、日本の医学者たちがその社会（コミュニティ）全体として医学者の戦争犯罪を明らかにしていこうとする動きはない。本シンポジウムではそうした日本とドイツの戦争犯罪およびそれをめぐる戦後責任の問題の在り様を明らかにしたい。

三月二三日（火）

一三：〇〇～一八：〇〇

司会 中山茂（神奈川大学 経営学部）

一三：〇〇 開 会

常石敬一（神奈川大学 経営学部）

「日本における医学の軍事動員」

一三〇・四五 米本昌平（三菱生命研究所 研究室長）

「優生学—日本とドイツの比較」

一四〇・三〇 F・ハンセン（ハンブルク）

「ナチズム時代の生物兵器開発」

一五〇・一五 中川米造（大阪大学名誉教授）

「戦争責任について日本とドイツの比較」

一六〇・一五 全体討論

一八〇・〇〇 閉会

会場：神奈川大学横浜キャンパス図書館

一階視聴覚ホール

主催：京都ドイツ文化センター

神奈川大学STSセンター

（つねいし・けいいち／経営学部教授）